

私の保育

動物雑居の幼稚園

東 亮 子



▲クジャクに餌をやる子どもたち

幼稚園には、現在クジヤクが九羽、アヒルが十二羽、ウサギ四羽、シラコバト三羽、クジヤクバト八羽、ハクチョウ二羽、ニワトリ十数羽などが、ごちゃごちゃに雑居(放し飼い)しております。その他禽舎や保育室にセキセイインコ、カナリヤ、モルモット、リス、カメ、ヤギなどがいますから、園の夜明けは賑やかだし、世話をするのもたいへんなものがあります。

これらの生きものが共存するようになるには、それなりにきっかけがありました。

古顔はやはりニワトリです。開園(昭和四十五年)当初、四本足のニワトリを得意気に描いたある子どもの絵にシヨックをうけて、本物を飼うようになりました。

「先生、こんなところに卵があるよ。」

「あらほんと。」

「ヒヨコが生まれるの。」

「そうね、うまれるかな。」

ペランダのはしにおいてあったポリバケツの蓋に、チャボの卵がひとつおいてありました。しばらくして二、三人の子が声をはりあげて、

「先生ちよつときて。」

「うまれたの、うまれたの。」

「さっきの卵がうまれたんだよ。」

「えっ、ほんと？」

そこにはチャボの親が座っていました。同じところで卵をつぶしている雌親をみて、ひよことまちがえたのでしょうか。今生まれたのだと思っただけです。

「あれはお母さんだよ。早く生まれなかなってあっためているのよ。」

子どもたちは、わかったようなわからないような顔をしていました。

それから数日後、木の下で暖めていた卵からカモのひなが次々にかえり、やがてお母さんカモのあとから行列をつくって歩きだしました。

「かわいいー！」

「ちいさいね。『かもさんおとおり』だ。」

とそれはそれは喜びました。

自分たちよりも小さくて、いかにもひよわそうなひなを、優しい、いたわりの気持ちでこめてみています。

教師のどんなに詳しい説明よりも、本物を見、手で触れ、

世話をするうちに、生きものの形態や生態を理解していることとおもいます。

おかげでこの頃は、四本足のニワトリも、極彩色のかざりたてたウサギも描く子はいなくなりました。

* * *

運動場の南側には七十平方メートルの池があります。池のあるじ格のハクチョウは、運動会のテーマがもたらしました。わたくしたちは、運動会は日頃の保育の延長線上にあるひとつの点にすぎないことを確認して、運動会では子どもたちが主体的に、自由な雰囲気のもとで、目的意識をもって活動するようにということを配慮し、毎年ひとつのテーマを決めて取りこんでいます。今年、『グルンパのようちえん』、昨年は『ユーちゃんのミキサー車』というぐあいです。

四十九年春には、白色の雄アヒルと、茶褐色の雌カモから十三羽のヒナがかえりました。そのうちの一羽は足が悪くビッコでした。そのためどこにももらわれず、園に残っていました。ところが九月になる頃から換羽がはじまり、みるみるうちにきれいな灰色と、緑色の頭部、首には白い輪がついて、尾羽の先には紫色のかざりまでつきました。もう子どもたちは、口々に「みにくいアヒルのこ」といっては、アンデ

ルセンの童話を想い出してかわいがりました。

運動会では、この『みにくいアヒルのこ』をテーマにしました。しかし、幼稚園のアヒルは、いつまでたってもアヒルで、白鳥になることはできません。そこで、県立公園のご好意により、つがいのコブハクチョウが仲間入りしたのです。

* * *

クジャクは、毎年四十個ばかりの卵を生んで、そのうち数羽のひなが育っています。卵は、保育室のインキペーターで孵化します。日が満ちてひながかえる数日間は、大騒ぎです。かわいいくチバシで、固い殻を長時間かかって破り、ビショビショのまま生まれてきます。孵化器の窓ガラスには、ひとみを輝やかせ、じっとみいる子ども顔があります。

人間の手によって育てられたひなは、自分は「鳥」だとは思っていないのでしょうか。このクジャクのひなは、子どもたちが遊んでいる所に行つて、ハンカチをついたり、くつや洋服、手までつついて話しかけているようです。

「先生、わたしね。ビッコちゃんをだつてくれるよ」

「ビッコは、泥だんごをしていると、すぐに来るんだよ」

昼食時に、

「ぼくの卵焼き食べちゃったよ。パツときて食べるんだも

ん、びっくりしちゃったよ」

「ピコ、おそとに行つてな」

「あ、またきた」

「ね、ピコ。おそとにいつてな。あとで遊んであげるよ」

* * *

十月のある朝、池のそばにある排水口（深さ二メートル）に一羽のアヒルが落ちました。直径九十センチの穴からはとびあがれず、キョトンとして目を上に向けています。

「どうしてはいつたんだらう」

「きつと、おちたんだよ」

「助けてあげよう」

「どうやって。あ、階段をつければいいよ」

「梯子をもつてきてき、そして、中にはいれればいいじゃないか」

「あ、またきた」

「ロープを降ろした方がいいよ」

「アヒルは、どうやってロープにつかまるんだ。つかま

れないよ」

「あ、そうか」

「アミですくつてあげよう」

「でも深いじゃない」

「そうだ。アミにひもをつけて降ろしたらいいよ」

「ひもじゃ弱いよ」

「水をき、たくさんの中に入れたら、アヒルが上がってくるだろう。そうしたら、出してあげればいいじゃないか」

相談の結果、アミに一本のひもがつけられ、水を少しづつ

入れはじめました。中のアヒルは、オロオロ。

「ほら、アミにはいいな」

「もつと、こつちこつち。もうちよつとこつち」

「ほらがんばれ。もうすこしだ」

アヒルの動きに声援をおくる子。アミを動かす子。二十分

後ようやく、すくいあげました。

「やった！」

「よかったね」

「バンザイ」

「もう落ちるんじゃないぞ」

子どもたちは満足顔でにこにこしながら、遊びに移って

きました。

このような小さな経験を通して、図鑑やことばの説明では得られない、いたわりや「優しさ」生まれてくるのではないでょうか。

* * *

当園には、二人の障害をもった子どもがいます。Rちゃん（七歳・女児）は、入園して三か月位はことばがなく、あちこちを歩きまわり、水が大好きでした。しだいに、彼女は、ウサギ、アヒル、ハクチョウと仲良しになり、野菜の皮やパンをもつて、よく池のそばで話し込んでいました。アヒルは、しゃがんだRちゃんのスカートにもぐりこんだり、抱かれたり、何回も洗ってもらう時もありました。

ハクチョウも、Rちゃんの大好きなお友だちです。同じクラスの子など、

「Rちゃんは、ハクチョウとお話しに幼稚園にくるんだね」と

といっていたくらいです。

人間に対しては全く興味や関心がなく、何といわれても返事ひとつしないRちゃんも、ハクチョウやウサギ、アヒルには過保護なくらい干渉します。

しかし今年の七月ごろから、Rちゃんの興味は、次第に優しい元氣な子や、年中組の男の子にむけられてきました。大好きなプールあそびをすることから、泣くことも、悲しむことも、笑顔いっぱい喜びぶ表情も、しぜんと多く見られるよ

うになりました。

わたしたちは、障害児といわれるお子さんを迎えるようになって、保育者というものはどの子に対しても広い、深い愛情をもって、全面的に受容的な態度でのぞまなければならぬと教えられてきました。もし保育者が、少しでも、いやな、困った存在だという思いが心の片隅にでもあろうものなら、彼らはその心の微妙なカゲすら読みとってしまいます。そればかりか、クラス全体を偏ったよからぬ方向へ引っぱっていった、よってたかかって「いやな、困った子」としていじめることにもなりかねないのです。

ところがこれは、動物の飼育にも全く同様にいえることです。

保育者が喜んで、にこやかに、自発的に動物の世話をやるのではなく、例えば、恐る恐る近づき、怖さ半分でエサをやり、いやな顔をして小屋の掃除をし、面倒くさそうに水をとりかえるようであったら、子どもたちには、動物との正しいふれ合いも、楽しい仲間としての意義も育たないでしょう。動物はただ危険なもの、きたないものといった嫌悪感だけが植えつけられるのではないのでしょうか。

* * *

さて、生きものには、死はつきものです。

この頃は、地域の協力があって、野犬やノラネコの被害がなくなり、放し飼いにしておいても、残酷な殺され方はなくなりました。

しかしそれでも、始めがあれば終りがあるように、アヒルもクジャクも死ぬことがあります。園庭の林の中には、子どもたち手づくりの墓標がひっそりと立っています。

うれしい誕生も、悲しみに沈む葬儀も、しかし子どもたちには生命の尊さや、生命の限界みたいなものを意識させ、哲学の世界へ導いてくれるようです。

「きつと野菜がほしかったんだね」

「水がなくなったのがまずかったかな」

「天国に行ったかなあ」

「土の中じゃ、寒いだろうな」

生きものが死ぬたびに、二度と失敗をくりかえさないように努力する姿が胸をうちます。汚れている水飲器を、水をかえるたびに指先で丹念に洗ってくれる子、エサ箱と、野菜箱を別々におこうと提案する子……。

* * *

チャボやアヒルの卵は、保育室でときどきホットケーキやクッキーになります。

園に隣接した三百平方メートルの畑でとれる野菜や果物も、大半は子どもたちの口にはいりませんが、動物のエサにもなります。もちろんそれだけでは足りませんが、町のパン屋さん、定期的にパンのふみを届けてくれるし、八百屋さんは残りの葉っぱを差し入れてくださいます。それでもエサ代は月に一万二千円ぐらいかかります。

人は自然にも、どうとうとする本能があって、自らその環境を守ろうとします。しかし、子どもの時代と豊かな触れ合いをもたず、うれしさや感動を知らないまま大人になったときどうでしょうか。図鑑や本だけの知識では、生命の尊さや死の悲しみ、弱いものへのいたわりや深い愛情は育たないと思います。わたしは、動物との触れ合いの中で、人間として尊い価値観が培われ、育てられていくことを願っております。

(埼玉・狭山ひかり幼稚園)